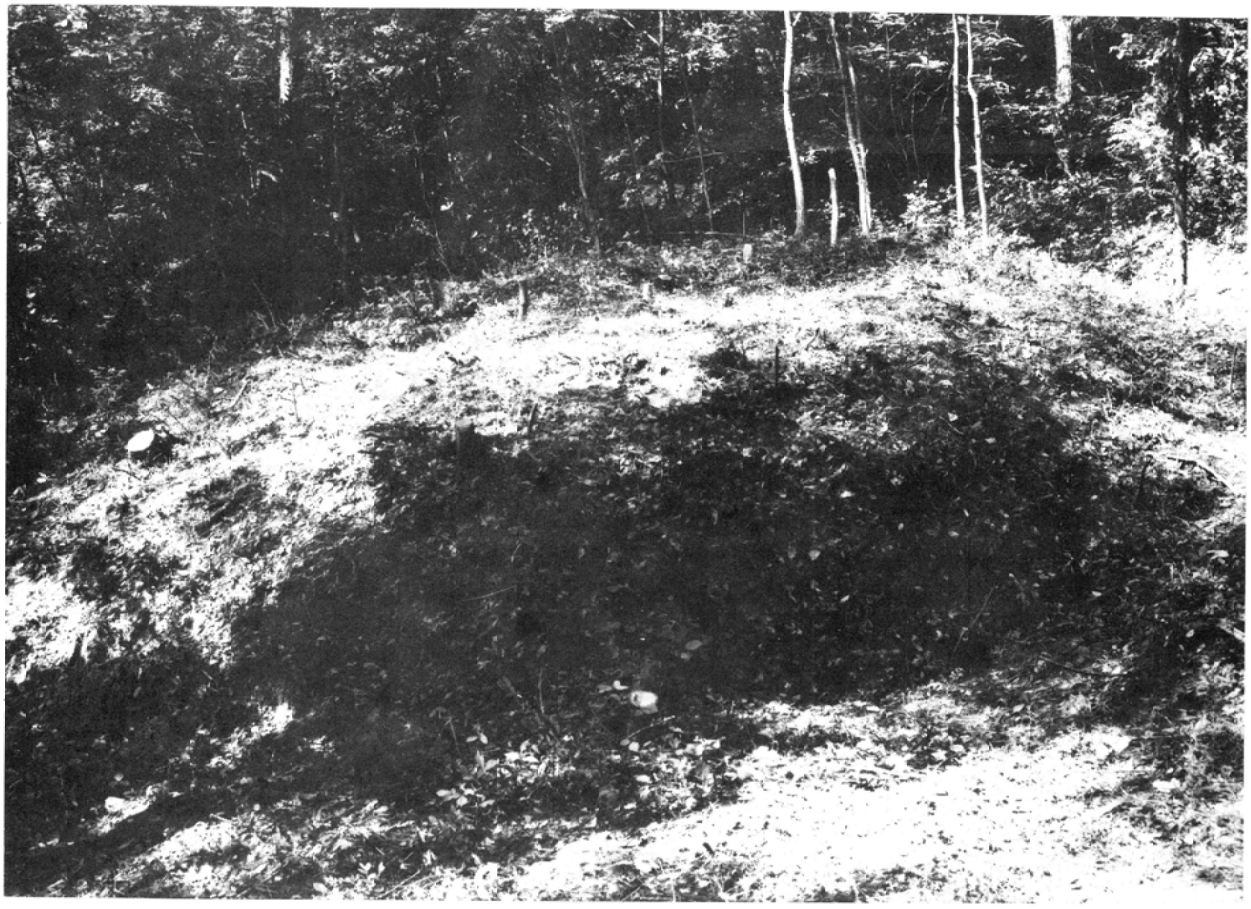
川西町埋蔵文化財調査報告書第12集

山形県川西町
下小松墳丘群薬師沢支群

K-862

第143・145号墳調査報告書



1988

川西町教育委員会

序

本報告書は、川西町教育委員会が、昭和62年度に調査を実施した川西町下小松墳丘群薬師沢支群143・145号墳の発掘調査をまとめたものであります。

下小松墳丘群の発掘調査は、昭和60年度より行ない今年で３年次にあり、その間すばらしい成果をあげることができました。第１年度は、小森山支群の前方後円墳より1.5mの直刀が、桧の鞘に納まったかたちで出土し、６世紀初頭の古墳と推測されるに至っております。第２年度は、鷹待場支群の方墳より６ｍの長さの墓壙プランの確認と土師器片の底部穿孔土器が検出し、４世紀末５世紀初頭の築造と推測されるにいたっております。

本年度の調査は、下小松墳丘群のなかで北東に位置する薬師沢支群143・145号墳の円墳を行なったものであります。

本調査にあたっては、地元地権者のあたたかい協力があってできたもので深く感謝もうしあげますとともに、直接発掘調査作業にあたっていただいた方々はもとより、県文化課・明治大学大塚初重先生・県考古学会の方々のご指導に対し、心から感謝と御礼を申し上げます。

尚、本年度出土した鉄製品は、奈良県の元興寺文化財研究所に搬送し、保存処理および鑑定を依頼しております。

昭和 63 年 3 月

川西町教育委員会

教育長　金子兵司

目　　次

序
目　次
調査要項・例言

※　本　文
Ⅰ　遺跡の概要 …… 1
Ⅱ　調査の概要 …… 2
Ⅲ　調査の成果 …… 3
Ⅳ　ま　と　め …… 12

※　挿　図
第1図　下小松墳丘群第143・145号墳位置図 …… 1
第2図　第143号墳主体部調査区拡張図 …… 4
第3図　第143号墳主体部 …… 5
第4図　調査区土層断面図 …… 6～7
第5図　第143号墳出土剣実測図 …… 10
第6図　第143号墳出土遺物 …… 11

※　写真図版
図版1　第143号墳調査前状況・第143号墳表土剝離状況・第143号墳A調査区
図版2　第143号墳墓壙プラン
図版3　第143号墳墓壙プラン
図版4　第143号墳墓壙内鉄剣(RM1)出土状況・第143号墳出土鉄剣(RM1)
図版5　第143号墳出土遺物
図版6　第145号墳調査状況

※　附　図
附図1　下小松墳丘群薬師沢支群第143号墳実測図
附図2　下小松墳丘群薬師沢支群第145号墳実測図

調　査　要　項

1．遺　跡　名　　下小松墳丘群薬師沢支群第143・145号墳
2．所　在　地　　山形県東置賜郡川西町大字下小松字薬師沢1,936－1　1,936－9
3．調査期間　　昭和62年6月15日～同年8月6日
4．調査主体　　川西町教育委員会
5．調査総括　　平　賀　梢　一（社会教育課長）
6．調査主任　　藤　田　宥　宣（文化財専門員）
7．調査指導委員　　柏　倉　亮　吉（山形県考古学会会長）
　　大　塚　初　重（明治大学教授）
　　加　藤　　稔（山形県考古学会副会長）
8．調査協力　　山形県教育庁文化課・川西町文化財保護協会
　　財団法人元興寺文化財研究所・大道工務店
9．調査参加者　　高橋宏平・黒沢一利・鈴木仙助・鈴木新三郎・平田源一
　　平田よしえ・竹田東一・小形まき子
10．地　権　者　　平　田　辰　雄
11．事　務　局　　大　沼　豊　雄（文化遺跡係長）

例　　言

1．本書は、川西町教育委員会が昭和62年度に実施した下小松墳丘群薬師沢支群第143・145号墳の発掘調査報告書である。
2．挿縮図は、それぞれにスケールを示した。
3．土色は、『標準土色帖』（農林省農林水産技術会議事務局監修）を基準とした。
4．本報告書は、遺物実測・トレース及び執筆・編集については藤田宥宣・高橋宏平総括は藤田が行った。
5．本調査に際し、地権者及び関係各位の格段のご配慮、ご指導賜りました事を記して厚く御礼申し上げます。

A～E　下小松墳丘群　　C　薬師沢支群
1 道伝遺跡　　a　145 号墳　　b 143 号墳

第１図　下小松墳丘群第143・145号墳位置図

Ⅰ　遺跡の概要

下小松墳丘群は、当川西町と飯豊町との境を成す丘陵地帯に築かれたものである。丘陵の標高は約270～280ｍあり、墳丘の多くは尾根の南東側に分布している。

同墳丘群は以前より、その数実に二百有余に及ぶ古墳群と考えられる一方で、発掘調査が行われていない事などにより、中世塚ではあるまいかという意見もあった。
遺跡の環境として、古墳時代住居跡の天神森古墳など古墳時代から平安時代にかけての遺跡が多く確認されているところである。

去る昭和58年に川西町教育委員会によって分布調査が実施された際、円形・方形の墳丘以外にも前方後円形のものが15基発見された。このことにより、一部地域の開発という背景のなかで築造時期やその様相を早急に調査すべく、三ヶ年の緊急発掘調査という具体策がとられたものである。今年度はその最終年度にあたる。

丘陵の墳丘は分布している位置で５つの支群（グループ）に分類をしており、南側のほうから便宜的に尼ヵ沢支群、小森山支群、鷹待場支群、薬師沢支群、永松寺支群とそれぞれ称することにした。

調査の初年度である昭和60年度には、小森山支群第61号墳(前方後円形)、及び第64号墳（円形）の２基の墳丘を発掘調査を行い古墳時代中期に築造されたことが確認されている。また翌年、昭和61年度には、北側の尾根の鷹待場支群第106・186号墳が調査され出土遺物等から第106号墳は４世紀後半、第186号墳は４世紀末～５世紀初頭にかけて、それぞれ築造されたことが明らかになった。今年度は、緊急発掘調査の最終年度として鷹待場支群の北側に位置する薬師沢支群第143号墳(円形)、第145号墳（円形）について発掘調査を実施したものである。

Ⅱ　調査の概要

今年度実施された薬師沢支群の発掘調査は、既に調査を終了した小森山及び鷹待場支群とのつながりなどを把握し、墳丘群の保存を図るものである。

この支群には、過去における踏査によって59基の墳丘が確認されている。その中で今回対象としたものは、丘陵東方の尾根先端にある143・145号墳で、共に円形を呈している。これらのうち特に、第145号墳のほうは山の神が祀られていることと、周囲を廻っている山道そして墳丘の外堀の規模などからみてもこの支群を代表するものといえる。

調査は、第143号墳において墳丘の規模、形態、埋葬施設の有無、遺物等の確認が要点であり、第145号墳に関しては、信仰の場ということもあり、周濠一ヶ所にトレンチを設定し、周濠の規模、遺物等の確認に留どまることになった。

調査期間は、6月15日から8月6日までであり、機材整理、現場の埋め戻し等の作業を含んだものである。調査経過は下記の通りである。

6月15日
　地鎮祭鍬入式（参加者25名）
　機材搬入
6月16日～17日
　第143号墳・表土剝離
　第145号墳・平板測量
6月18日～19日
　第143号墳・樹木根等の除去・整理
6月22日～23日
　第143号墳・B調査区トレンチ掘り、平板実測
　第145号墳・B調査区トレンチ掘り
6月24日～25日
　第143号墳・3調査区掘り下げ
　　B調査区遺物RP1検出
6月30日～7月2日
　第143号墳・A調査区遺溝掘り下げ
　　B調査区掘り下げ遺物RP2～5検出
7月9日～17日
　第143号墳・各調査区掘り下げ
　　A調査区拡張（墓壙プラン確認）
　第145号墳・B調査区遺物RP10検出
7月18日
　現地説明会（参加者65名）
7月20日～24日
　第143号墳・各調査区掘り下げ、遺物RM3点検出、埋葬形態判明、平板測量
　第145号墳・埋め戻し作業
7月27日
　第143号墳・埋め戻し作業
7月28日
　第143号墳・出土鉄器錆落とし作業、実測図作成（室内）
7月29日～8月4日
　第145号墳・埋め戻し作業
8月5日
　第143号墳・埋め戻し作業完了
8月6日
　調査機材搬出、（発掘調査完了）
8月8日
　下小松古墳群遠祖追善鎮魂祭
　（於 下小松・永松寺）

Ⅲ　調査の成果

１４３号墳

調査は、墳丘の立木伐採をおこなったのち、表土剝離、実測図（1/50）作成を実施した。表土を取り除いたところ、墳丘上部には、直径10～20cmの平たい川原石が集積され約2500個を数えることができた。また、石英粗面岩質凝灰岩片が散在し、墳丘上面は、幅40cm深さ10cmの凹部が直径２ｍの環状に見られ、その中心部に直径60cmの楕円形の凹みが確認された。散在する石英粗面岩質凝灰岩片は、墳丘表土全体から確認され、墳丘上に凝灰岩の石塔が設置されていたものと推察できる。

墳丘の大きさは、直径13.5ｍの円墳で、高さは、周濠底部より1.35～3.92ｍの高さを測ることができる。

Ａ調査区

143号墳の墳頂中央部に設定した調査区で、墓壙の有無を確認するために行なったものである。調査区は、墳丘上部の中央部西側に２ｍ×４ｍのトレンチを行なった。墳丘表土下20cm、盛土２・３層より直径70cmの円形の土壙が確認された。第２層は、石英粗面岩の小片が敷きつめられたものであり、墳丘上に石塔が設置する以前に造られたことがわかる。この土壙から遺物等の確認はされなかった。また、この埋め土は人為的なものと推察している。

調査区で一部墓壙のプランを検出できたが、全体を把握するため、東・南側に調査区を拡張し掘り下げを行なった。盛土を掘り上げたところで、地山層を切る墓壙プランを検出した。墓壙を確認するまでの調査区拡張作業工程は第２図のとおりである。

主体部

主体部は、墳丘上部平坦部のやや南側に構築され、墳丘周濠より見るとほぼ中央に位置している。主体部の主軸方向は、Ｎ－40°－Ｅである。墓壙プランの大きさは、長さ3.5ｍ幅２ｍの大きさで、やや台形状である。墓壙の掘りかたを便宜的に３段階にしていると推察できる。１回目は、丘陵斜面に対し平行に長さ2.9ｍ、幅1.7ｍの大きさを20cm掘り下げを行なっている。２回目は、その掘り下げを行なった段階で中央部を長さ2.65ｍ幅１ｍの大きさを25～45cm掘り下げ、底部を水平にし、長方形に造っている。３回目として、さらに中央部を半円柱状に長さ2.5ｍ幅35cm深さ10cmの掘り下げを行ない墓壙の掘り下げを完了している。墓壙の底面は、ほぼ水平なレベルで標高243.18ｍ、墓壙直上の墳丘表面より墓壙底部までの深さは、2.15ｍである。墓壙内部の土層状況および形態より埋葬形態は、割竹形木棺直葬と推察され、割竹形木棺の大きさは、土層断面等より

長さ2.5ｍ、幅55cmと推測できるものである。主体部の堆積土は、９層に区分することができた。

副葬品として木棺より鋤先・櫛・剣・銅鏡・刀子・鉄鏃が出土した。

Ｂ調査区

143号墳谷側周濠部の確認調査区で、５ｍ×2.5ｍの大きさである。周濠は約70cm堆積土に覆れ、土色より７層に分けることができた。Ｆ５層より摩滅した須恵器甕片ＲＰ１が出土した。Ｆ１層よりＲＰ２．３．４．７土師器片が出土した。この出土状況は墳丘より周濠に流れ込んだものである。周濠の幅は、1～1.5ｍ深さ約70cmの大きさである。

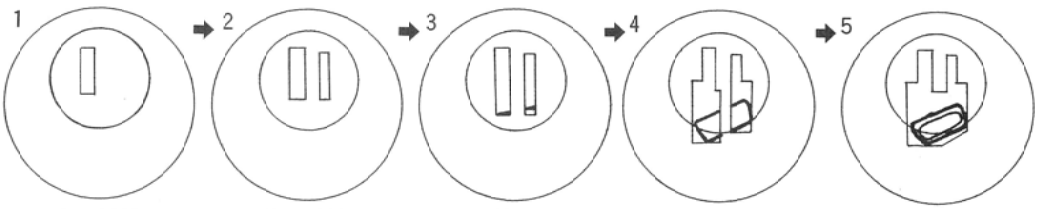
Ｃ調査区

143号墳山側の周濠の確認のため墳丘北側のところを3ｍ×2.5ｍ掘り下げたものである。このところは、土橋状に盛土されており、その土層を調査したものである。発掘調査の結果この盛土は、古墳築造後に造られたもので、土層の状況より、古墳の築造年代と平行するものではない。覆土は、４層に分けることができた。地山層を約１ｍあまり掘り下げをおこない周濠を造っていることが確認された。この調査区においては、古墳築造時の遺物は確認できなかった。埋め土上層Ｆ４下より石塔片が出土している。

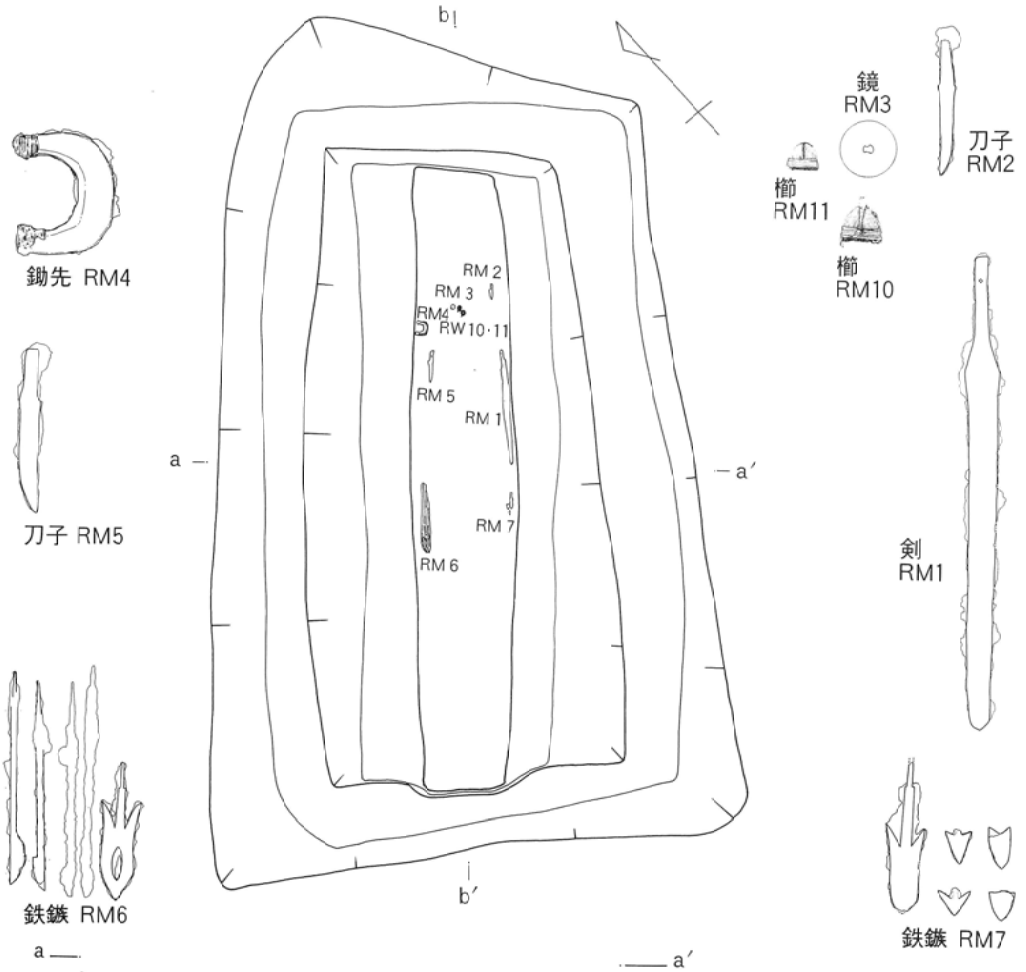
１４５号墳

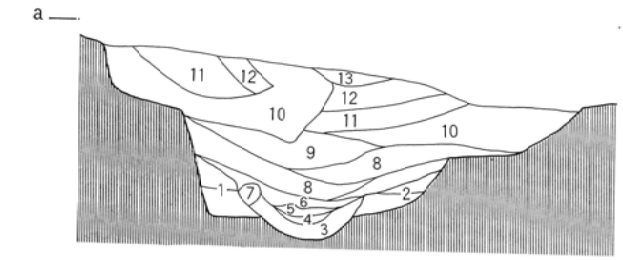
この古墳は、薬師沢支群において北東の方向に延びた尾根の先端にあり、薬師沢支群の中で最も大きな円墳である。調査は、立木伐採ののち実測図作成（１/100）を実施した。墳丘の大きさは、南北23ｍ東西22ｍ高さ約3～5.5ｍである。墳丘上部には、143号墳同様平たい川原石が数多く散乱している。

この古墳の南側の周濠部を５ｍ×２ｍ掘り下げた。周濠の堆積土は、５層に分けられＦ２層よりＲＰ10摩滅した須恵器甕片が出土している。また、同層より平たい川原石が同様に出土している。このことより、周濠部は、古墳築造当時のままとはいえず中世の石塔の建立時になんらかの手が加えられたものと推測している。この145号墳は、今回の発掘調査において古墳と断定するにいたっていない。



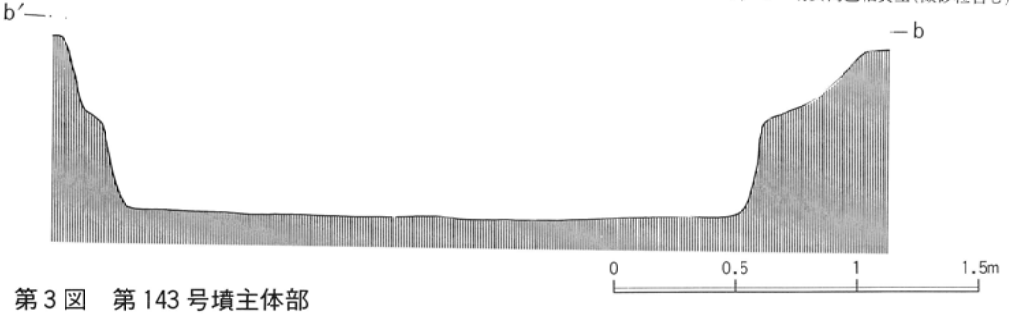
第２図　第143号墳主体部調査区拡張略図





第 143 号墳 A 調査区(主体部)

1	10Y R	4／4	褐色粘質土
2	10Y R	6／8	明黄褐色粘質土(微砂粒)
3	10Y R	5／8	明褐色微砂質粘土
4	10Y R	6／2	灰黄褐色粘質土
5	10Y R	5／4	にぶい黄褐色粘質土(炭化物)
6	10Y R	3／4	暗褐色粘質土(炭粒を含む)
7	10Y R	5／8	黄褐色粘質土(小礫を含む)
8	10Y R	5／8	明黄褐色粘質土
9	10Y R	4／4	褐色粘質土
10	10Y R	5／8	明黄褐色粘質土(レキを含む)
11	10Y R	3／4	暗褐色粘質土
12	10Y R	3／4	暗褐色粘質土(炭化粒含む)
13	10Y R	6／8	明黄褐色粘質土(微砂粒含む)



第 3 図　第 143 号墳主体部

刀子
RM2

M1

鉄鏃 RM7

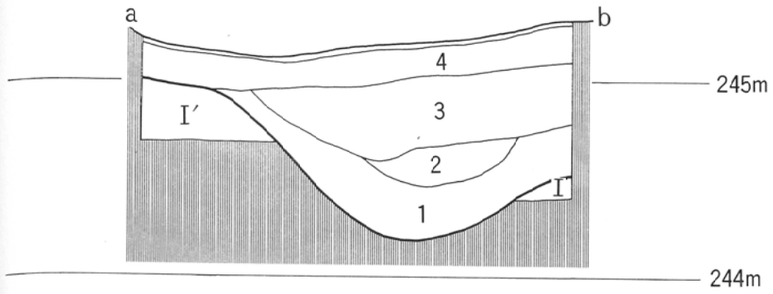
主体部)

質土(微砂粒)
質粘土
質土
色粘質土(炭化物)
土(炭粒を含む)
土(小礫を含む)
質土

質土(レキを含む)
土
土(炭化粒含む)
質土(微砂粒含む)

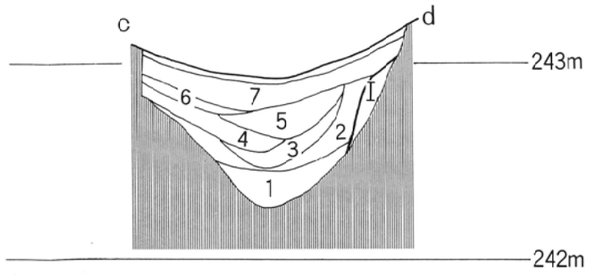
—b

1.5m



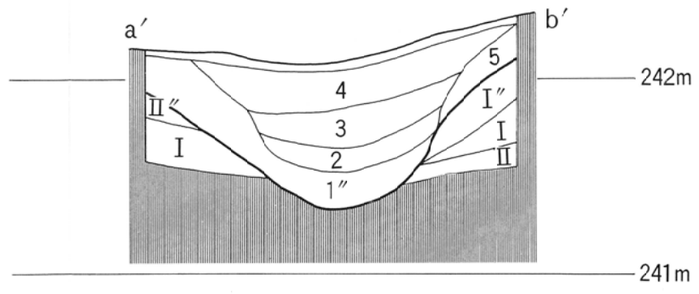
第 143 号墳 B 調査区

I　5YR　5／8　明赤褐微砂質土
1　7.5YR　4／3　褐色粘質土
2　5YR　5／6　明赤褐色微砂質土（酸化礫が5％混入）
3　5YR　5／6　明赤褐色微砂質土（酸化礫が20％混入）
4　7.5YR　5／6　明褐色土（小礫が30％混入）
I′ 7.5YR　4／4　褐色土



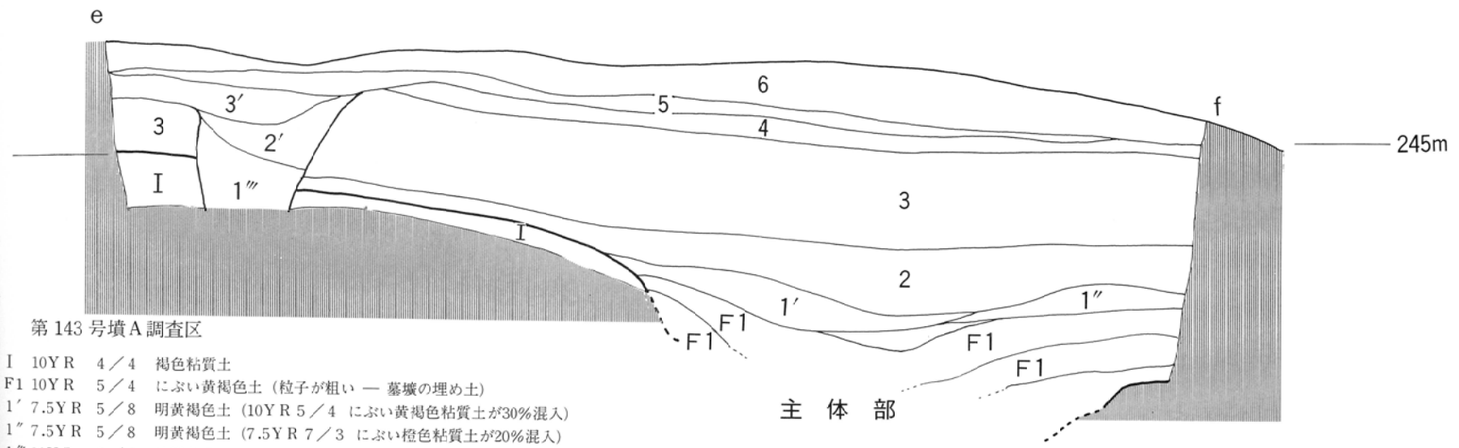
第 143 号墳 C 調査区

1　10YR　3／4　暗褐色土
2　10YR　5／4　にぶい黄褐色土
3　10YR　4／6　褐色粘質土に（酸化礫が15％混入）
4　10YR　2／2　黒褐色土
5　10YR　5／8　黄褐色粘質土（小礫が5％混入）
6　10YR　5／8　黄褐色粘質土
7　10YR　4／3　にぶい黄褐色土
I　7.5YR　5／6　明褐色粘質土



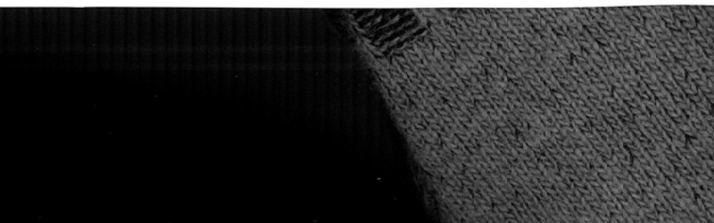
第 145 号墳調査区(周濠部)

I　5YR　5／8　明赤褐色砂質土
I″ 2.5YR　5／8　明赤褐色土
II　7.5YR　5／8　明褐色砂質土
1″ 7.5YR　5／6　明褐色土
2　7.5YR　4／3　褐色土（凝灰岩が混入）
3　7.5YR　5／4　にぶい褐色土
4　7.5YR　5／3　にぶい褐色土
5　10YR　4／6　褐色土



第 143 号墳 A 調査区

I　10YR　4／4　褐色粘質土
F1 10YR　5／4　にぶい黄褐色土（粒子が粗い — 墓壙の埋め土）
1′ 7.5YR　5／8　明黄褐色土（10YR 5／4 にぶい黄褐色粘質土が30％混入）
1″ 7.5YR　5／8　明黄褐色土（7.5YR 7／3 にぶい橙色粘質土が20％混入）
1‴ 10YR　3／4　暗褐色土
2　10YR　6／4　にぶい黄褐色土（7.5YR 5／8 明褐色土が50％混じり合っている）
2′ 10YR　5／4　にぶい黄褐色土（炭化物を含む）
3　5YR　6／6　橙色微砂質土（層全体に小礫が入っている）
3′ 10YR　5／3　にぶい黄褐色粘質土
4　10YR　5／3　にぶい黄褐色粘質土
5　7.5YR　7／8　黄橙色微砂質土（2.5Y 8／1 灰白色の凝灰岩が多量に混入）
6　10YR　4／6　褐色土（表土に小礫混入、上部は河原石）



第 145 号墳調査区(周濠部)

I　5YR　5／8　明赤褐色砂質土
I′ 7.5YR　5／6　明褐色砂質土
I″ 2.5YR　5／8　明赤褐色土
1′ 7.5YR　5／4　にぶい褐色土
1″ 7.5YR　5／6　明褐色土
2　7.5YR　4／3　褐色土（凝灰岩が混入）
3　7.5YR　5／4　にぶい褐色土
4　7.5YR　5／3　にぶい褐色土

0　1　2　3m

第 4 図　調査区土層断面図

出土遺物

墳丘盛土より土師器片２点・周濠の覆土より土師器片４点・墳丘表土層より石塔片・主体部の副葬品として剣・鉄鏃・鋤先・刀子・銅鏡・櫛が出土した。出土状況は第３図のとうりで、主体部中央南よりに長軸と平行なかたちで切先を西向きに鉄剣があり、対する北側には、鉄鏃が切先を西向きで、東側に銅鏡櫛という配置であった。この出土遺物の埋葬された配置より、東側が埋葬者の頭部と推察される。

(1) 主体部の副葬品

剣　ＲＭ１

鉄剣は、全長55.2cm剣長の長さ42cm・茎長13.2cm・茎尻から2.8cmのところに目釘孔がある。関は両関でゆるやかに茎にいたる。剣身中央に稜のもたないもので、断面は凸レンズ状である。

鉄鏃　ＲＭ６・７

鉄鏃は、２個所から出土した。ＲＭ７は、鉄剣の切先のところから５点出土し、その北側よりＲＭ６が約25本纏まった形で出土した。

ＲＭ６は、約25本纏まって出土したもので、現在形をおさえ実測を行なったものは９点である。ＲＭ６－１～８は、細根鏃(片刃・腸抉？・長頚)のもので残る16本がこの形である。その中でＲＭ６－９ただ１点のみ広根鏃（長三角・腸抉・有窓・有頚）である。

ＲＭ７－１は、広根鏃（長三角・腸抉・有頚）である。ＲＭ７－２・３は、広根鏃（三角・腸抉・無頚有舌）である。ＲＭ７－４・５は、広根鏃(三角・無頚・無舌？)であり、ＲＭ７－５は、腸抉を示す。この５点が纏まって出土したものである。

鉄鏃に関する計測は、整理実測し報告したい。

刀子　ＲＭ２・５

刀子は、２点出土した。ＲＭ２は、全長11cmと推定され、刀身部長7.3cm・幅９mmである。刀身は、やや棟が反り平造りである。棟区と刃区は直に落とされ、刃区は刃部から内湾している。茎断面は長方形を呈し、茎尻は錆びが付着している。ＲＭ５は、全長13.3cm・刀身長9.1cm・幅1.7cmである。茎部には鹿角が遺存している。平棟平造りのふくら枯れの造りで、棟区は直に落とされ、刃区は茎にかけて段差がないものである。

銅鏡　ＲＭ３　無文鏡

鏡は、櫛とほぼ同位置から出土したもので、面直径推定46mm・鏡縁の厚さ１mm・鈕高約５mmのものである。表面は文様のない緑灰色をなし、遺存がよくないものである。

櫛　ＲＷ10・11・12

この３つの櫛は、結歯式漆塗竪櫛と呼ばれるもので、材質は竹である。櫛は、漆を塗った結束部の頭部だけの遺存である。

ＲＷ11の遺存する櫛幅は、2.7cm・結束部長2.5cmであり、細い竹材を11本並べてＵ字状にまげて糸で縛り漆を塗ったものである。ＲＷ10も、基本的に作り方は同様であるが、材を結束する頭部中央部に竪を挟む材を用いている。遺存する櫛幅3.4cm・結束部長3.7cmで、14本の竹材を用いているものである。ＲＷ12は、出土した３点のなかでもっとも小さく遺存状況も悪く、櫛に塗った漆が、一枚の皮状になったものである。

鋤先　ＲＭ４

鉄製の鋤先で、Ｕ字状のものである。鋤先の横幅は10cm、遺存する縦の長さ8.2cm・厚さ３mmである。断面は刃先の反対側がＹ字状で、木質の鋤先部を受けたものであろう。鋤先の刃先部分で3cm・横側で1.7cmである。Ｕ字状の木質部と接する部分に横位に走る木質がみられた。

(2)　その他の出土遺物

土師器片　ＲＰ３～９

土師器片は、９点の出土であるが器形を推察できるまでのものはなかった。土師器片は坏と瓶であり、胎土は礫を含むものである。坏の内面は、ナデ・ミガキがみられ、外面は、ナデのほかヘラ削りとも見られるが、磨滅が著しいものである。黒色処理は、施されていない。

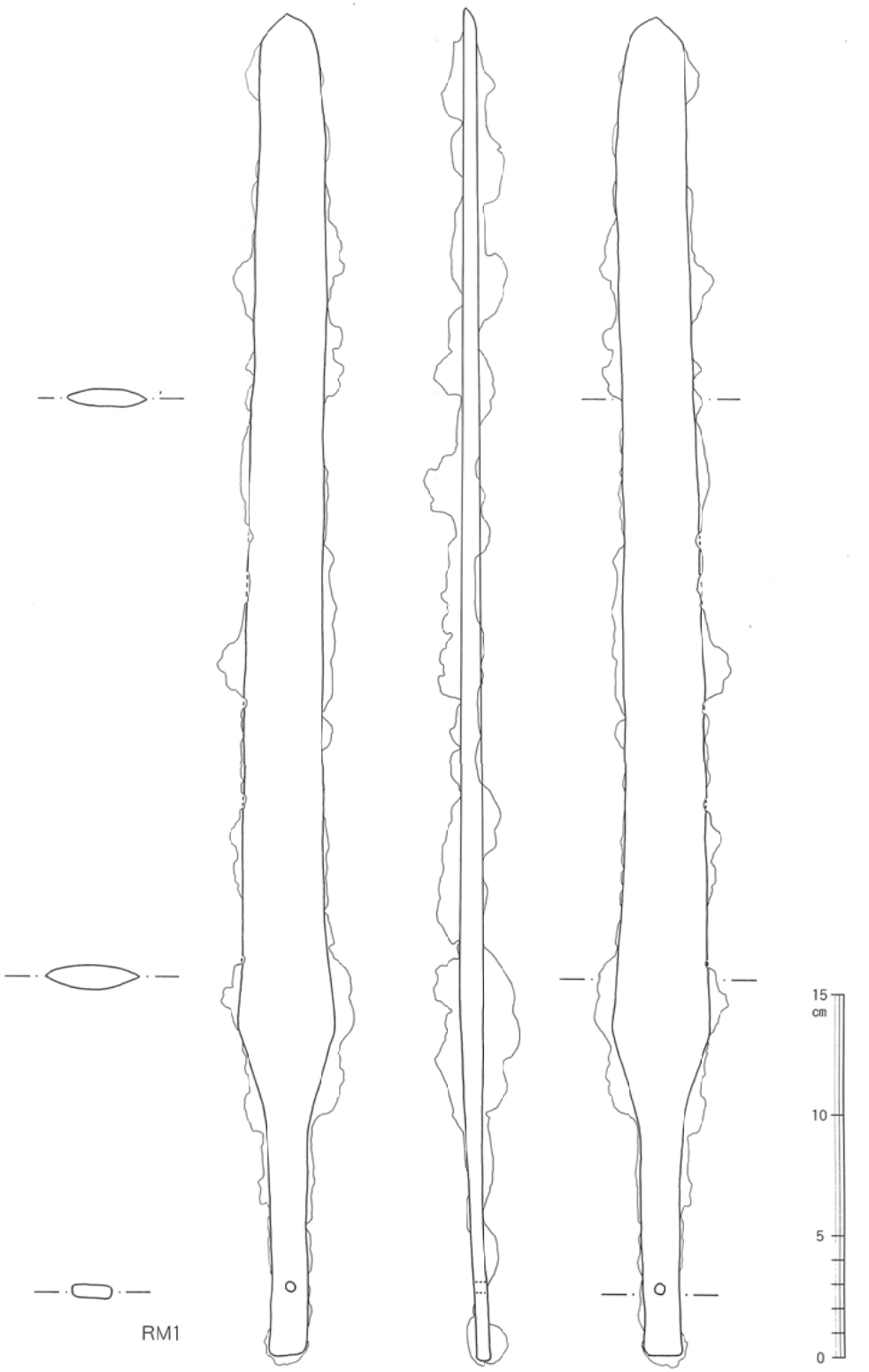
須恵器片　ＲＰ１・２

須恵器坏片ＲＰ１は、磨滅が著しいもので河川より拾われ川原石と共に運びこまれたものと推察される。Ｂ調査区周濠Ｆ５層は近くの道伝遺跡最下層の稜椀でありその層からの出土である。ＲＰ２は、表土層川原石と共に出土した須恵器甕片で、表面は須恵器甕特有の平行の叩き目があり、内面は横位のヘラ削りのあとが確認できるものである。破片の厚さ・形状より、９世紀後半頃の小型の甕と思われる。

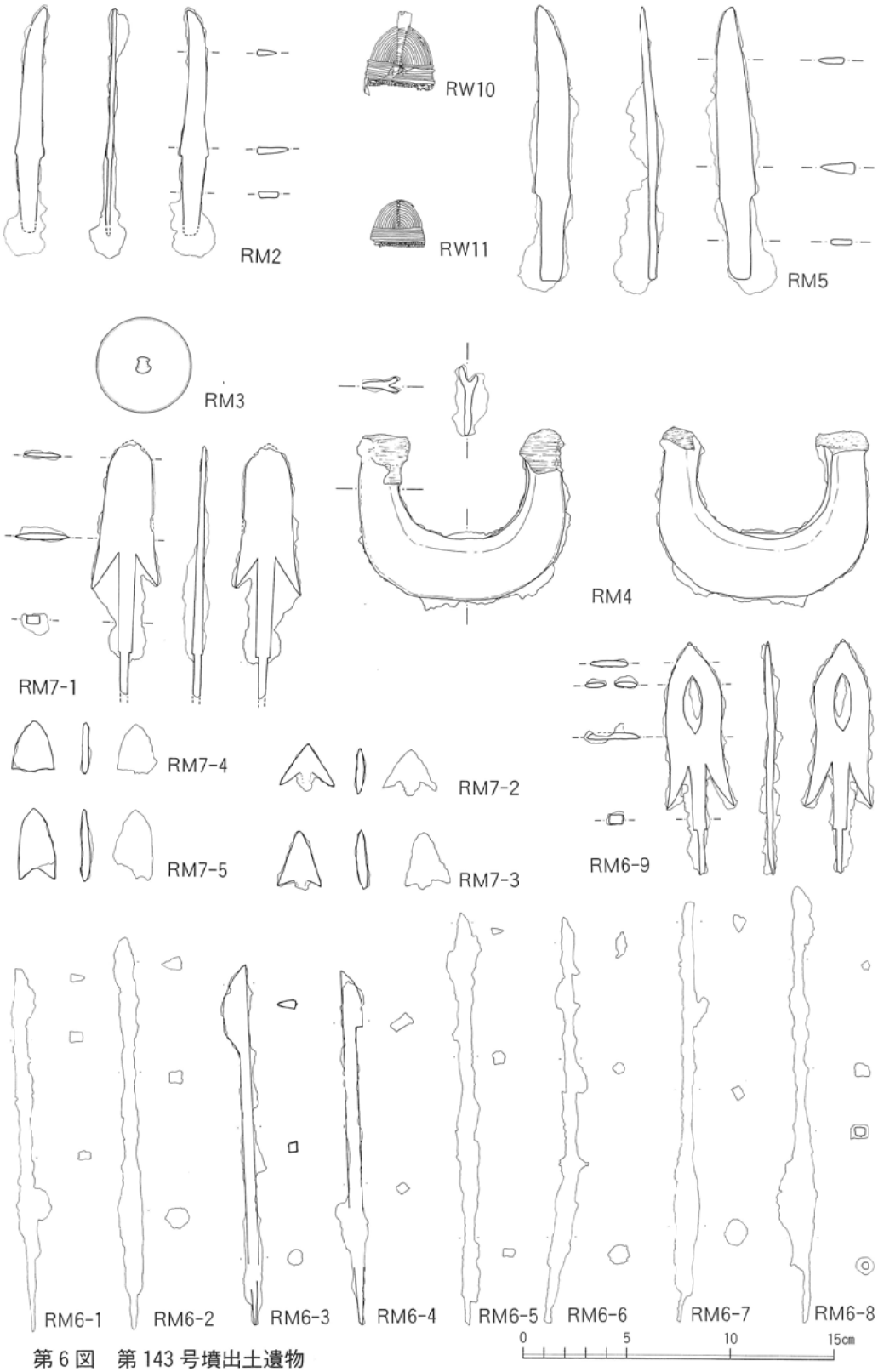
中世陶器片　ＲＰ　２ｂ・10

ＲＰ２ｂは、内外面とも明瞭な叩き痕が見られない。胎土は、須恵器のような還元焼成の色であり、内外面は越前系の色をなし、石英砂が所々に見え、信楽の様相を示すものである。残存片より器高40～50cmの須恵器系中世陶器甕であろう。

ＲＰ10は、片口土器片とみられ内面に５mm間隔の凹み線がみられる。叩き痕はなく、須恵器系の磨滅の著しいもので、145号墳周濠調査区Ｆ２層よりの出土である。



第5図　第143号墳出土剣実測図



第 6 図　第 143 号墳出土遺物

Ⅳ　ま　と　め

形　態

薬師沢支群は、昭和58年度の分布調査において59基の墳丘を確認し、その内訳は方墳49基・円墳10基である。方形の墳丘の大きさは、一辺５ｍから22ｍのものであるが、その中で最も多いのは、一辺10～15ｍの墳丘である。また、尾根上の５～７基を除くとすべて山寄せの造りである。墳丘は、字薬師沢の下小松丘稜の中で単独の形で立地している塔ヶ峰と呼ばれている山の尾根と東南の斜面だけに造られているものである。山頂上20ｍクラスの方墳３基を中心として墳丘が分布している。調査を行なった143・145号墳は、この山頂より北東にのびる尾根の先端部に位置するものである。墳丘の造られた斜面側東方に置賜盆地が広がっている。143号墳の近くには同様の規模の墳丘が連なっている。

143号墳は、円墳で直径13.5ｍ、墳丘の高さは尾根側周濠底部より1.35ｍ谷側の周濠底部より3.92ｍである。

主体部は、割竹形木棺直葬であり、長さ2.65ｍ・幅１ｍの大きさで、副葬品は、鋤先・櫛・剣・銅鏡・刀子・鉄鏃である。調査により築造は、整地した地山に主体部を設置し埋葬後、周濠を掘り盛土を行なった無段築造の古墳である。

年　代

143号墳の築造年代を推察するには、主体部の築造法・副葬品・周濠からの出土遺物が重要な手掛かりといえる。しかし、周濠部の発掘調査面積は少なく、周濠部より出土した遺物で年代を推察できる遺物は、確認されていない。この古墳の年代を推察するには、主体部の築造法と副葬品があげられる。

主体部の構造は、割竹形木棺直葬であり、長さ2.65ｍ・幅１ｍの大きさである。山形県において木棺直葬の埋葬形態を比較できるのは、お花山古墳群衛守塚２号墳・下小松古墳群小森山61号墳のみである。中でもお花山古墳群１号墳とはよく類似している。出土遺物等も10号棺の出土遺物鉄剣と同様のものといえるようである。このお花山古墳群の築造年代は、５世紀後葉から７世紀前半に位置ずけられており、中でも１号墳は、お花山古墳群の成立から展開期と推察されている。東北地方における割竹形木棺直葬の多くは、４世紀末から５世紀末と考えられていることから、出土品等に鑑み５世紀末葉としておきたい。

薬師沢支群59基は、丘稜尾根より斜面にかけて古墳を築造している。古墳に埋葬された者の占有地と考えた場合は、山頂部に位置する古墳が最も有力なものと推測されるも

のであり、この薬師沢支群の成立期のものが頂上部に築造したと考えられる。143号墳は、薬師沢支群の古墳群全体からみて低い斜面に設置されている。このことから143号墳は、薬師沢支群の成立期のものではないものと推察している。

薬師沢支群全体の調査を待たないと支群の築造年代は言い得るものではないが、現在の古墳分布調査のなかで、薬師沢支群は、5世紀初頭には築造され始めたものと推察している。

おわりに

下小松墳丘群の小森山支群・鷹待場支群・薬師沢支群の発掘調査が終了した。この三ヶ年の調査において古墳であることが判明した。そこで、下小松墳丘群5支群のうち小森山支群・鷹待場支群・薬師沢支群の3支群を下小松古墳群と称することにする。

今後、古墳群の整備を重点に計画を進め、また、今まで行なった古墳の発掘調査報告書をまとめて発刊する予定である。特に鉄製品について、奈良県元興寺文化財研究所に依託し、保存処理を進めている関係で遺物についての計測及びレントゲン透過写真等の報告を計画している。

〈引用・参考文献〉

1966　佐藤寒山　「日本の美術」No.6　刀剣

1985　法政大学　「本屋敷古墳群の研究」

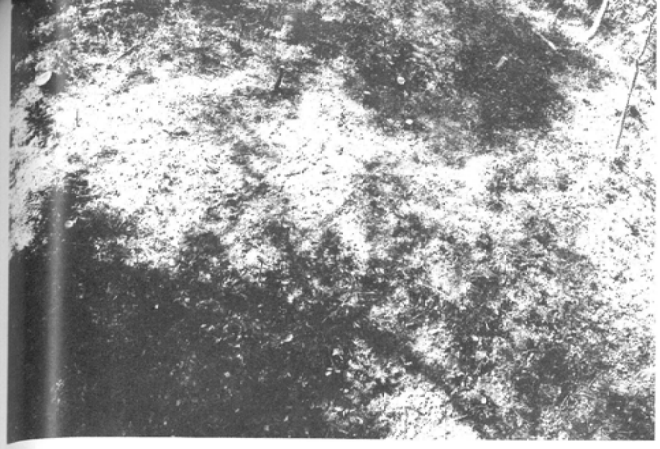
1985　山形県教育委員会　「お花山古墳群」山形県埋蔵文化財調査報告書　第85集

1984　川西町教育委員会　「天神森古墳」川西町埋蔵文化財調査報告書　第6集

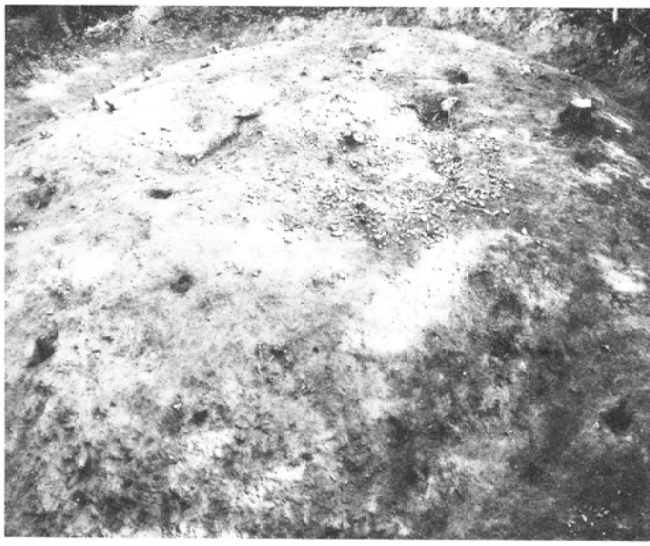
1984　川西町教育委員会　「道伝遺跡」川西町埋蔵文化財調査報告書　第8集

1986　川西町教育委員会　「第61・64号墳」川西町埋蔵文化財調査報告書　第10集

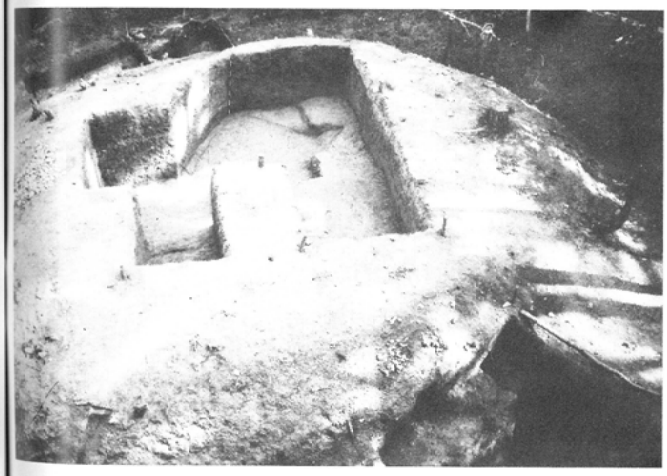
1987　川西町教育委員会　「第105・106・186号墳」
川西町埋蔵文化財調査報告書　第11集



第 143 号墳調査前状況
立ち木伐採後（北東より）



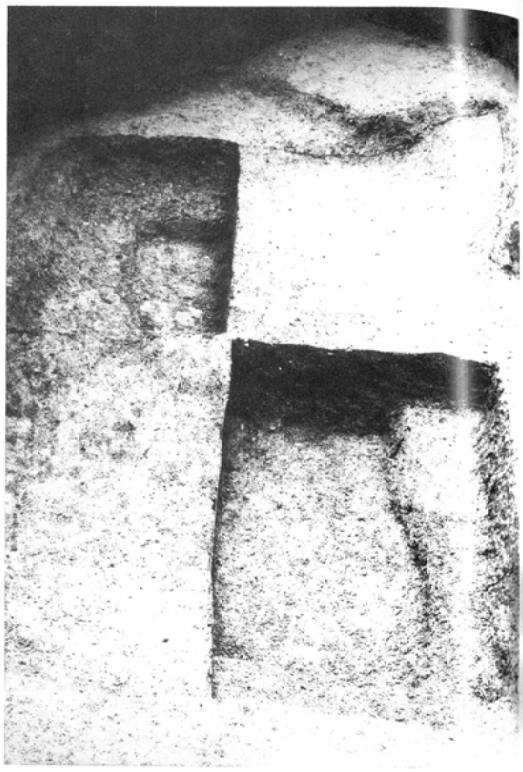
第 143 号墳表土剝離状況（北東より）



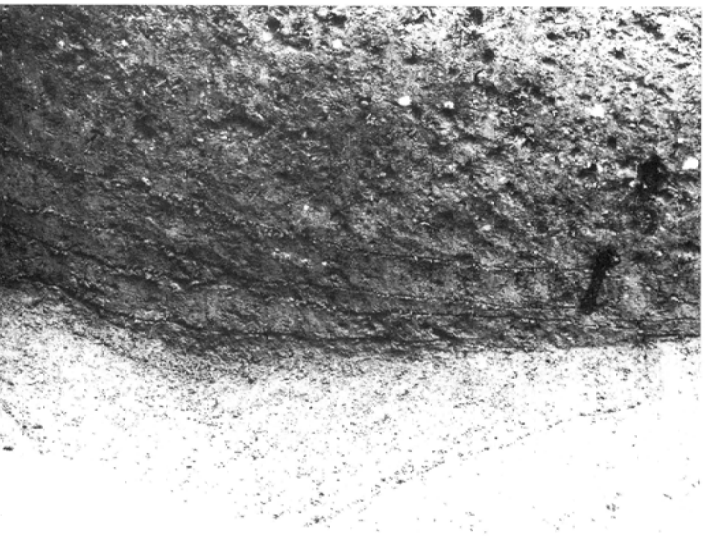
第 143 号墳 A 調査区
墓壙確認状況（北より）

第 143 号墳 A 調査区
墓壙掘り下げ状況（北より）

第143号墳墓壙プラン確認状況(東より)

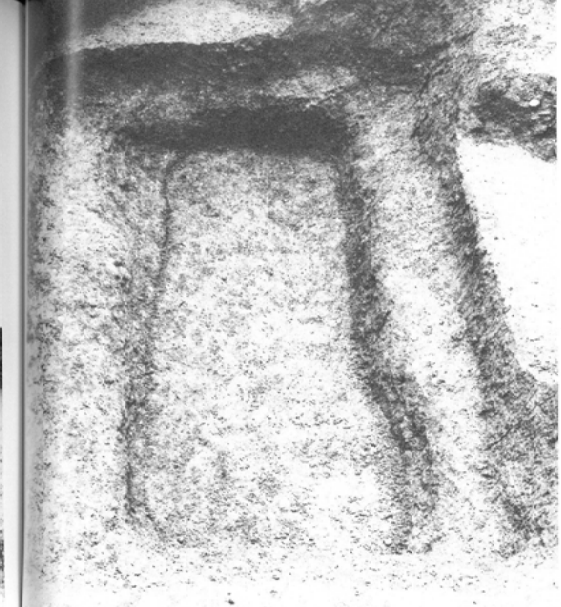


第143号墳墓壙掘り下げ状況
ブリッジ設定による土層確認(東より)

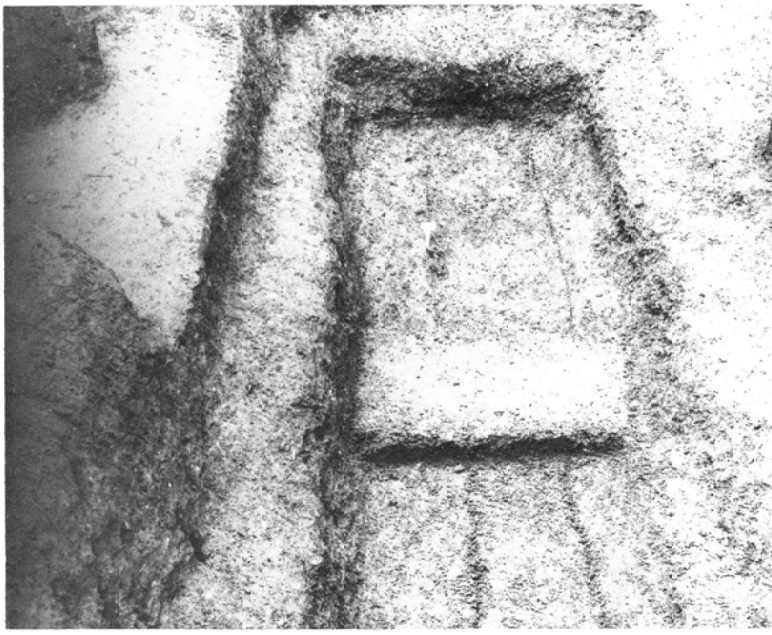


第143号墳墓壙プラン一部確認・土層状況(南東より)

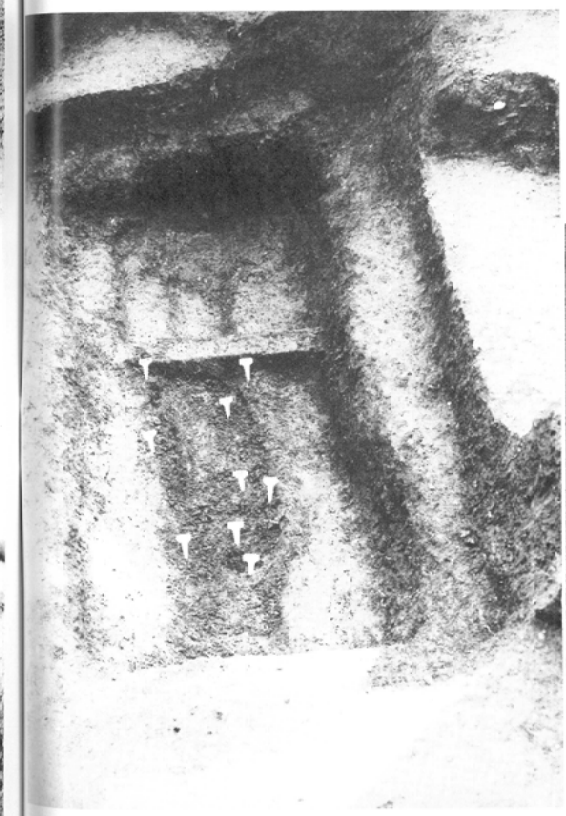
第143号墳墓壙プラン一部確認・土層状況
(東より)



第 143 号墳墓壙プラン覆土除去状況（東より）



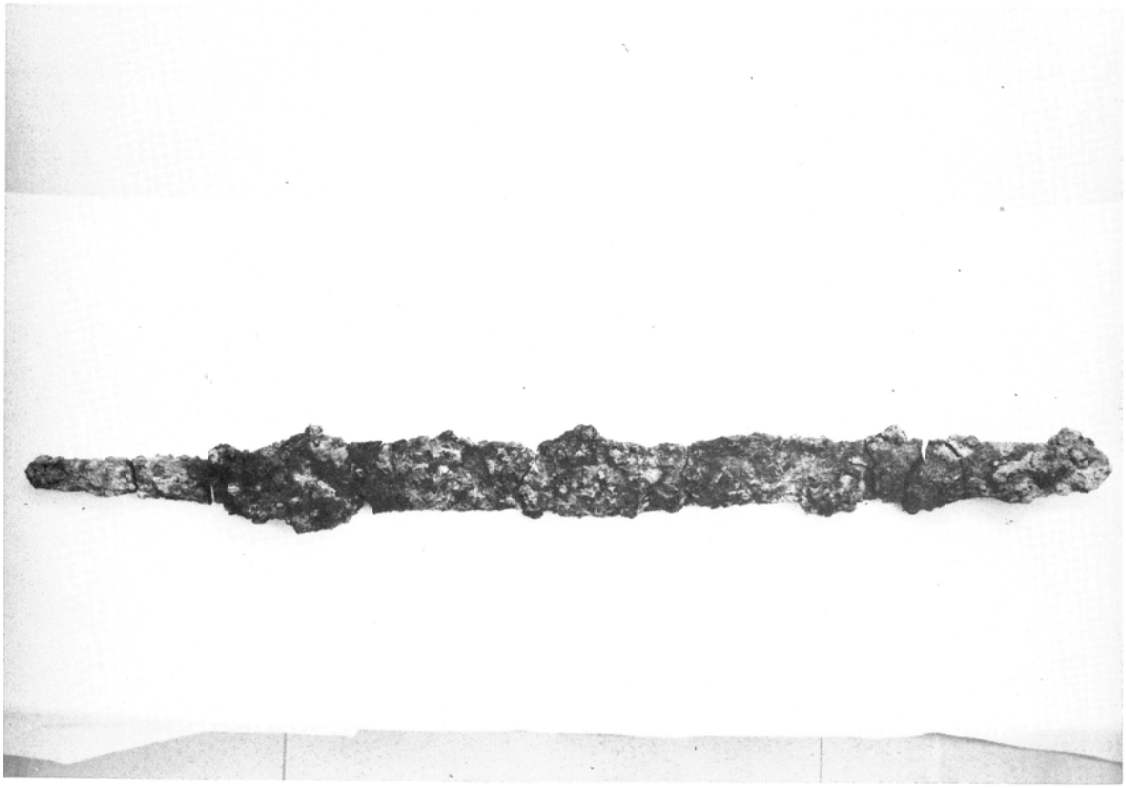
第 143 号墳墓壙棺設置プラン状況（西より）



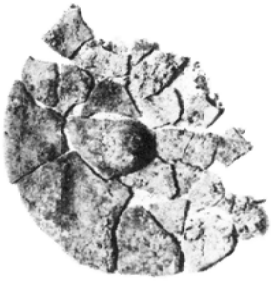
第 143 号墳墓壙内副葬品出土状況（東より）

第 143 号墳墓壙プラン完掘状況（東より）

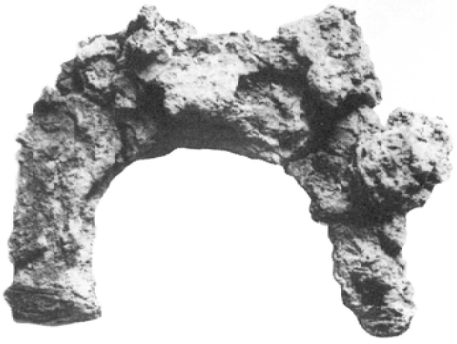
第143号墳墓壙内鉄剣（ＲＭ１）出土状況



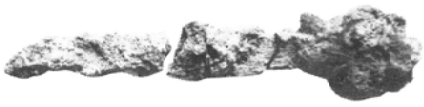
第143号墳出土鉄剣（ＲＭ１）



RM3　銅鏡

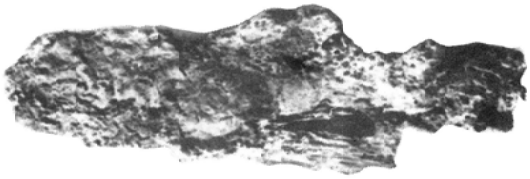


RM4　鋤先



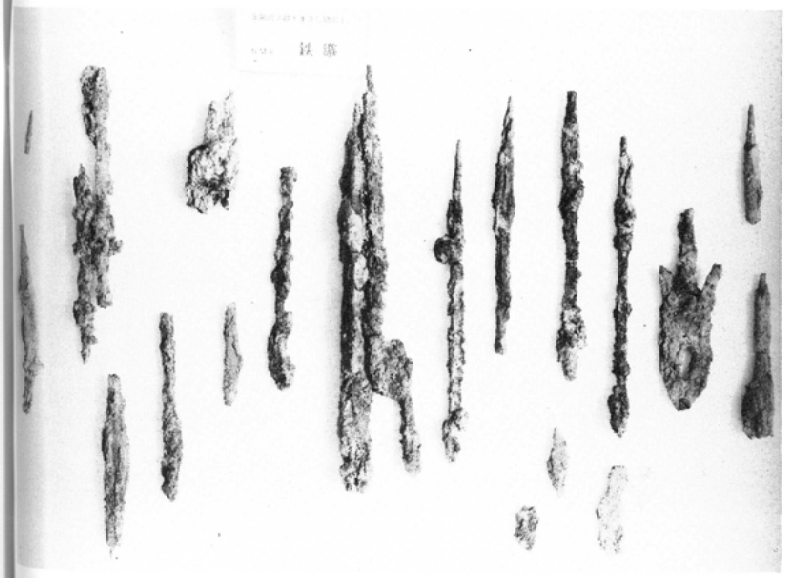
RM2　刀子

RM5　刀子

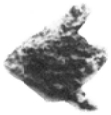


①

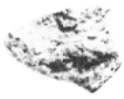
RM7　鉄鏃①～⑤



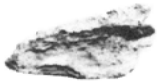
RM6　鉄鏃



②



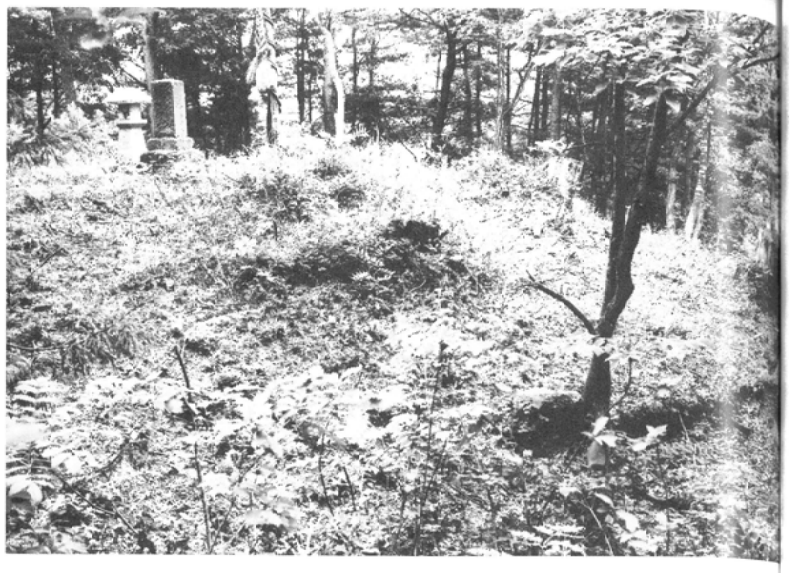
③



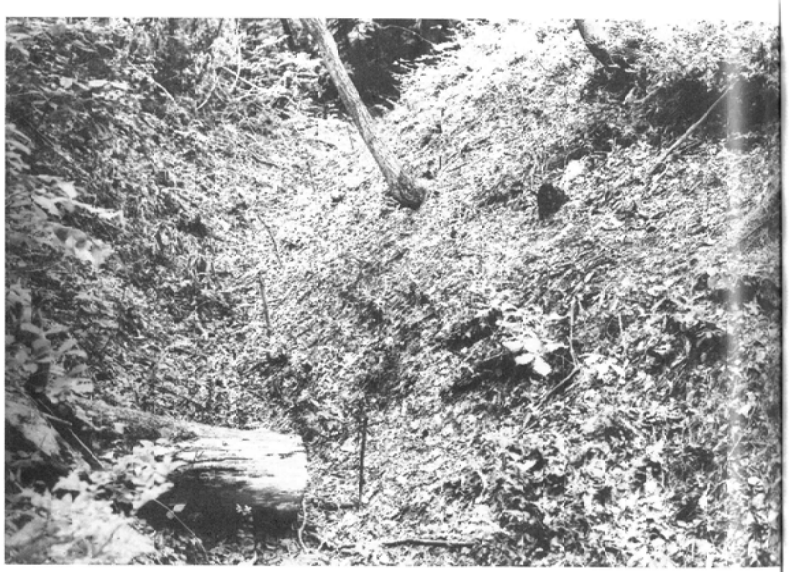
④

⑤

図　版　6



第 145 号墳調査前状況
（西北より）

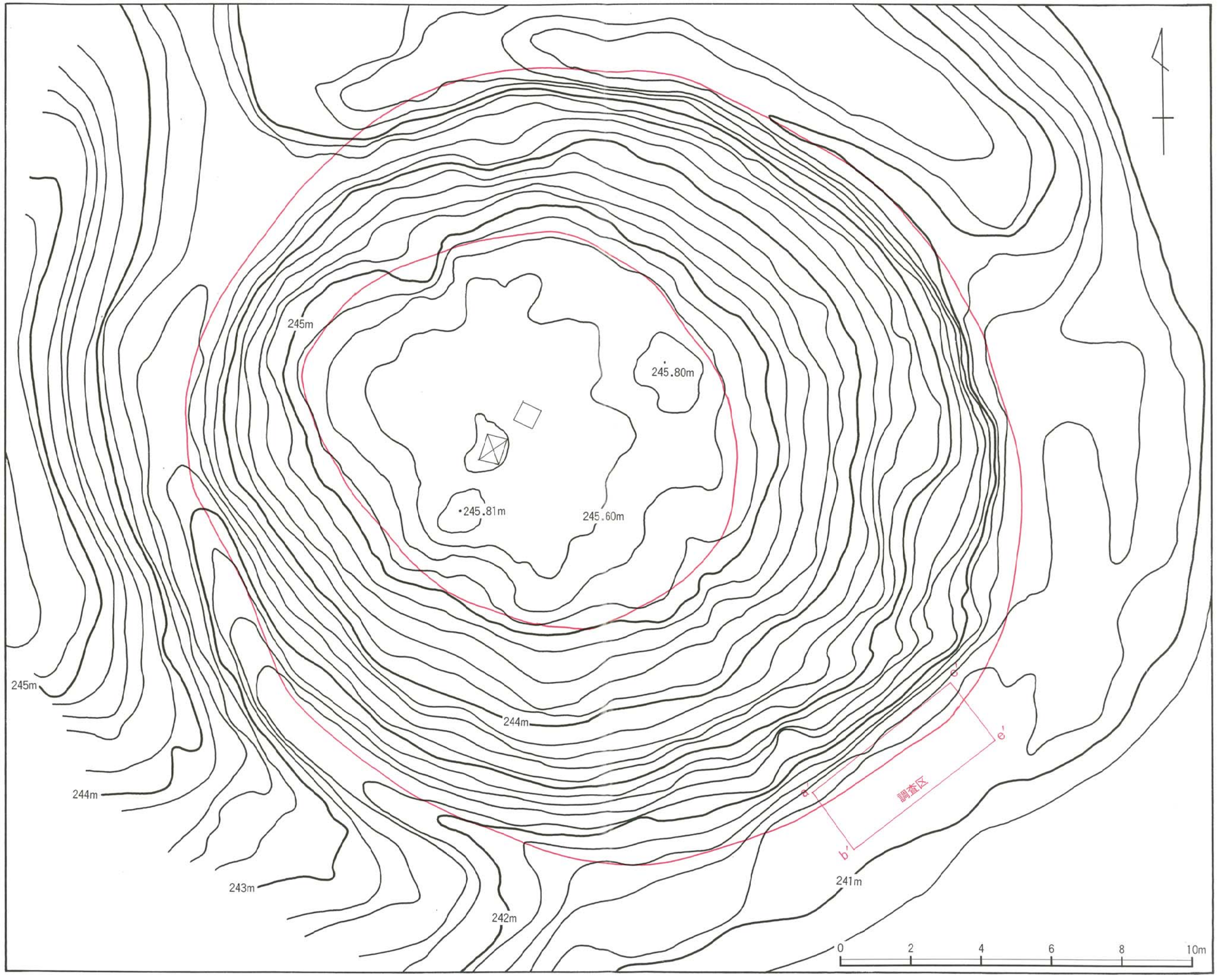


第 145 号墳調査前状況
西側周濠部状況
（南より）

第 145 号墳南側
周濠部調査区
（南東より）

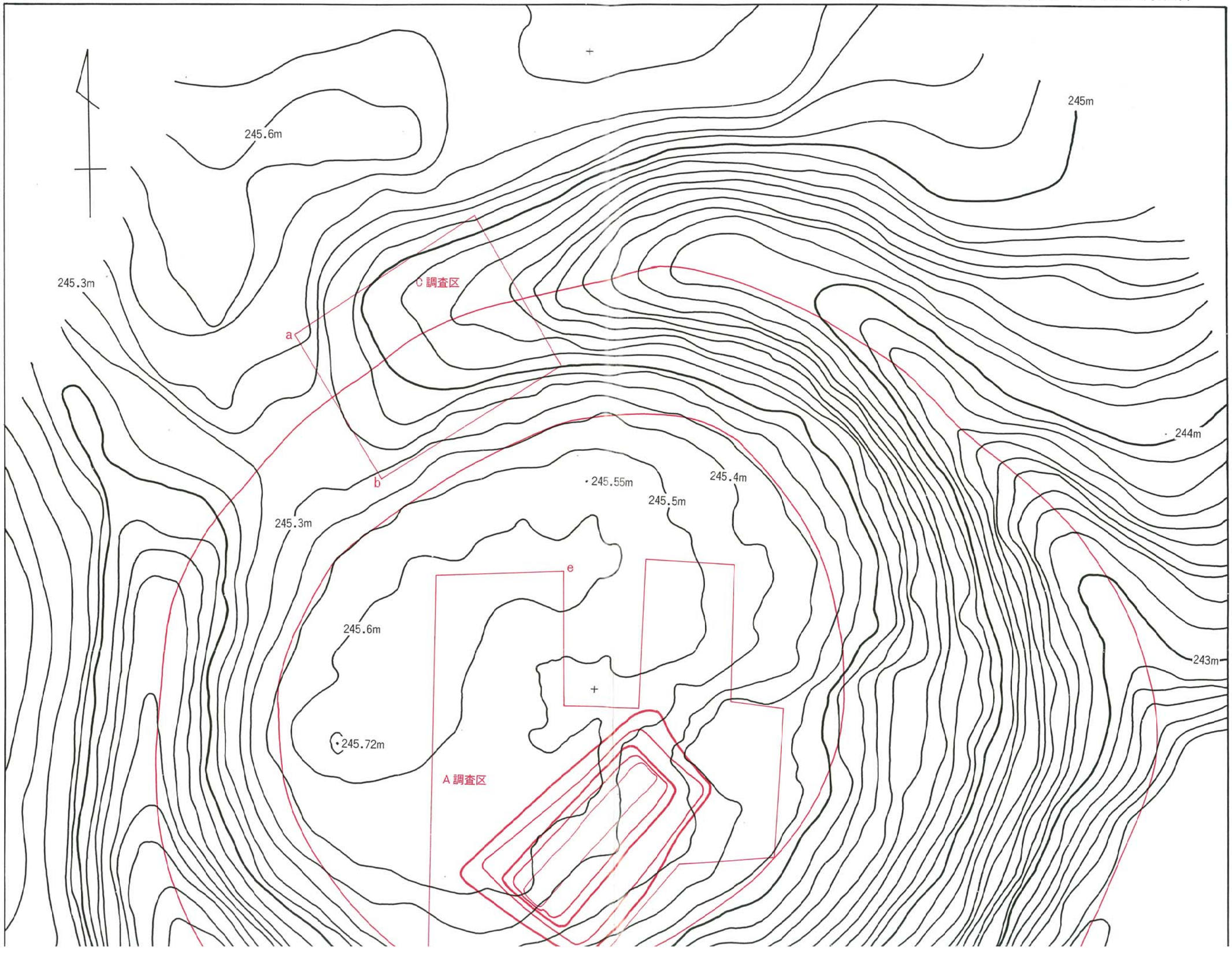
附図2　下小松墳丘群 薬師沢支群 第145号墳実測図　S 1/100

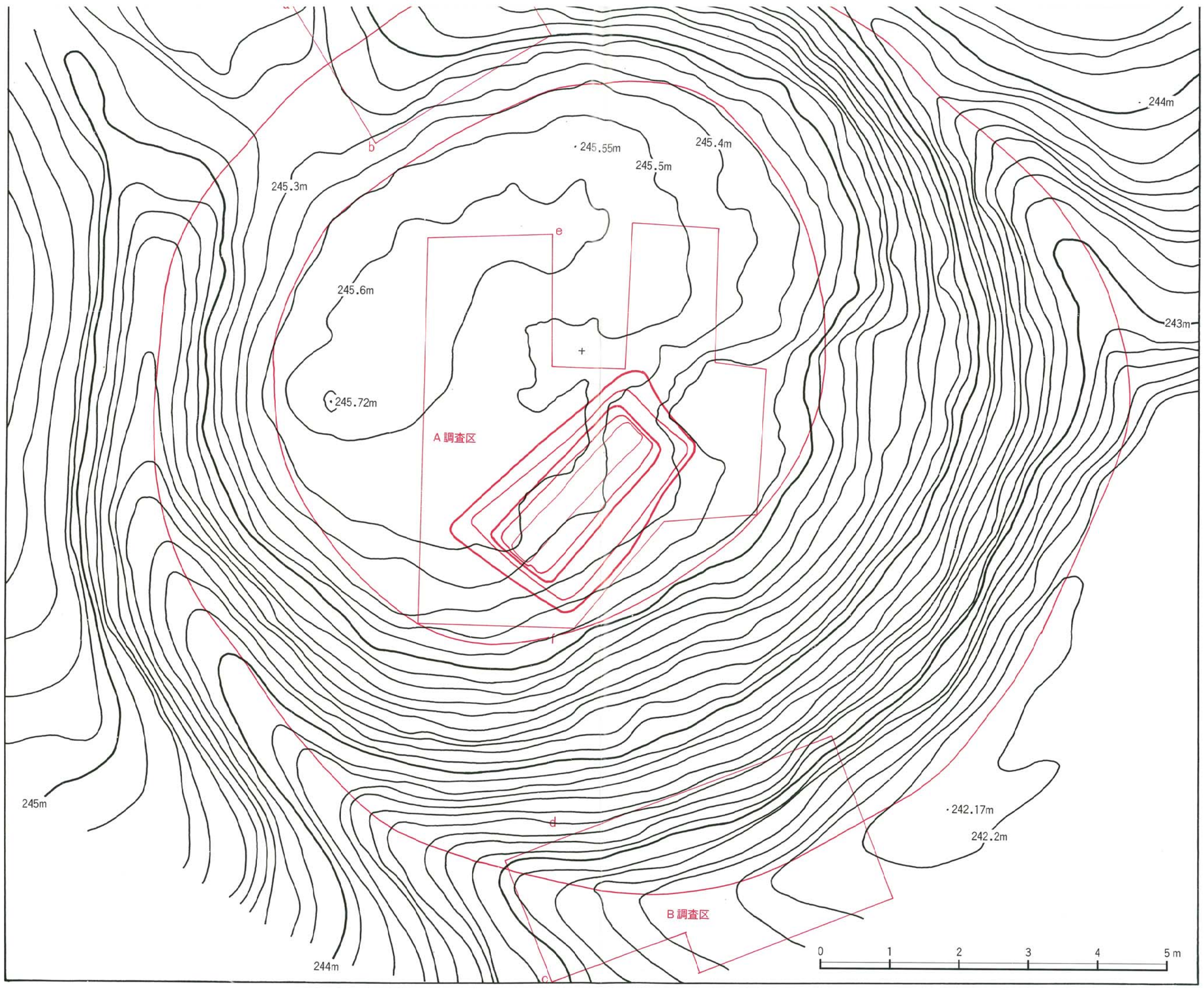
昭和63年3月　川西町教育委員会



附図1　下小松墳丘群 薬師沢支群 第143号墳実測図　S 1/50

昭和63年3月　川西町教育委員会




a
b
245.3m
245.55m
245.4m
245.5m
244m
e
245.6m
243m
245.72m
A 調査区
f
245m
d
242.17m
242.2m
B 調査区
244m
c
0
1
2
3
4
5 m

下小松墳丘群　薬師沢支群

第143・145号墳発掘調査報告書

昭和63年３月20日　印刷
昭和63年３月30日　発行

発 行　川西町教育委員会社会教育課
印 刷　㈲　山　口　印　刷